心肺蘇生法に神様は必要か？

「『ガデスクリスタル』？」

　素っ頓狂な声を出して硬直した俺に、妖精モドキは『ガデスクリスタル』なるアイテムの説明をしてくれた。

　曰く、神を数センチ程度にまで小さくして、閉じ込めておくための道具なのだとか。見た目、人が青いクリスタルに閉じ込められたような感じなのだそうだが、閉じ込められた神の力は半減し、しかも中からは絶対に脱出出来ないものなんだとか。

　しかもその『ガデスクリスタル』は、中に閉じ込めたやつの力を少しだけ自分も得ることが出来るということだ。

　クリスタルは加工することで、ペンダントや指輪に出来るそうだが、恐らくネックレスみたいに加工されているだろうと妖精モドキは言った。

「この世界のことは瞬様から色々お聞きしましたが、それに閉じ込めて持ち運んでいる可能性が一番高いですね。タンタロスはこちらの地理には疎いでしょうし、瞬様のように人間の助けを得ている可能性もほとんどないでしょうから」

　どうせこの世界に来たのなら、折角だからこの世界のパワースポットとか遺跡とか、そんなところを使って欲しかったとは、口が裂けても言えない。

「まあ、『ガデスクリスタル』に七人の神が閉じ込められているんだろう、ってことは分かった。だが、どうやってそれを探す？」

「はっはっは。瞬様、言わずとも分かっているでしょう？　ネックレスなのですから、昨日襲ってきたテュポーンみたいな奴等が首に下げているに決まっているじゃないですか」

　そう言って、妖精モドキは笑顔を見せる。

　ああ、なる程。つまり……

「また、探し歩かなきゃいけないわけね……」

　その通り、と頷いた妖精モドキの顔を、思いっきり殴ってやったらどんなにスカっとするだろうか。

　俺はこの時、そう真剣に考えていた。

「ところで妖精モドキ」

「はい？」

　俺と妖精モドキは、昨日妖精モドキの『護衛対象』を探した時と同じように、街を歩いていた。

　探し回って半時程経った頃だろうか。そういえば、と聞かなくてはならないことを思い出した俺は、バッグの中から外の様子を伺っている妖精モドキに囁き声でそう聞く。

「お前は俺に『心臓を止めて欲しい』って言っていたが、どうやって心臓を止めればいいんだ？」

「……え？」

　妖精モドキが、何を言っているんだと言わんばかりの声をあげる。

「敵の攻撃をその身に受ければ、嫌でも心臓は止まるのでは？」

「ああ、なるほど。それなら確かに……じゃねーよ！」

　つい大きな声を上げてしまう俺。だが当然だろう。

　俺は『何事か』とこちらを凝視していた通行人に軽く頭を下げながら、妖精モドキが入っている鞄を小突く。

　逃げるようにその場を離れながら、俺は小声で妖精モドキに話しかけた。

「お前それ、俺に『死ね』っつてんのと同じだからなっ？」

　全く冗談じゃ無い。確かに昨日の俺は、あのテュポーンの攻撃を食らって運良く心臓が止まってくれたようだが、次も同じように心臓が止まってくれるとは限らない。

　というか、それ以前の問題だ。一歩間違えれば死ぬかもしれないことにチャレンジ出来る程、俺のチャレンジ精神は旺盛ではないのだ。どうせ心臓を止められるにしても、なるべく安全かつ痛みを伴わない方法でお願いしたい。

　だが、俺の言葉に妖精モドキは唸る。曰く、

「とは言っても、他に方法はないのでは？　私では瞬様の心臓を止めるだけの力はありませんし……」

　まあ、確かに妖精モドキの言うことにも一理あるかもしれない。

　『心臓を止める』といっても、俺達には具体的な案は無いのだ。これは、早めに何かいい方法を考えておく必要があるだろう。

「……仕方ない。いい方法が見つかるまで、お前の言う通り、『敵の攻撃を敢えて受けて』やるか」

　そう呟いて、俺は、もう何度目かも知らない溜息を吐いた。

　その時だ。

「……おや？」

　バッグの中の妖精モドキが、何やら怪訝そうな声を上げたのだ。

　何かあったのかと聞くと、どうやら、昨日見たテュポーンと似たような『気』を感じたらしい。

　そして同時に、妖精モドキの言う『他の七人の神』の内の一人の『気』もあったのだとか。

「いやいや」

　だが、俺は首を振る。だってそうだろう？　昨日の今日だ。そんなに簡単に見つかるはずが……

「……」

　と、そこで俺はふと考える。

　妖精モドキは、『気』と言った。これがもし、俺達の知っている『気』と同じものだとしたら。

それは、科学的に見れば、不確かで不明瞭なオカルトな与太話。存在するはずのない第六感である。

　しかし同時に、『気』というものは遥か太古より人間に――主に、『武人』と呼ばれる存在に――備わっている、言わば『危機回避能力』、もしくはもっと簡単に、『センサー』とでも呼ばれるものだ。

　こいつが感じた、という『気』は二つ。片方は『敵』で、こっちはまあ、どうでもいいのかも知れない。こいつの『勘違い』だ、と言われても、文句は言えないはずだ。

だが、もう片方は『神様』だ。

　こいつは、態度からしてみて正直忘れかけることがままあるものの、長いこと『神様』と呼ばれる存在に仕えている。『神様』と言うからには、恐らく俺の想像もつかないような力を持っているのは間違いないだろう。

常日頃からそんな力と一緒にいるこいつが、今、その神様の『気』を感じた、と言うのだ。果たしてそれを、ただの『勘違い』という言葉で一蹴しても良いのか、と問われれば、それは甚だ疑問が残る。

　加えて、だ。

　俺は、自分の胸に目を落とす。

　なんだか、妖精モドキがその『気』を感じてから、胸の中が熱い……とでも言えばよいのだろうか？　ともかく、何かを俺に訴えかけてきているかのような、そんな感じがする。

「……まあ、行くだけ行ってみるか？　案内しろ」

「はい、瞬様！」

　バッグの中で、妖精モドキが小声で、だが元気な声で頷くのが分かり、俺は妖精モドキの案内する先に向かっていった。